吉村第二土地区画整理事業に伴なう埋蔵文化財発堀調査報告書

浮ノ城 遺跡

昭和６１年３月

宮崎市教育委員会

は　じ　め　に

近年、全国的に様々な大規模開発行為に伴って埋蔵文化財の発見が相次いでいます。

本市においても例外ではなく、宅地造成、道路開発、ほ場整備等の開発が増えつつあり、埋蔵文化財包蔵地が開発にかかるという状況も増えてまいりました。

今回調査した吉村第二区画整理事業にかかる地域は、古くから弥生時代～古墳時代の遺物を多く出土しており、県内外の学者によって古代の稲作水田跡の存在が期待されているところでありました。

そこで、地元区画整理組合、宮崎市区画整理課との協議を重ね、文化財保護に対する理解と協力を得て発掘調査を行い、記録保存をすることになったものです。

調査にあたりましては、上記の関係者の皆さん、現場工事関係者の皆さん、発掘調査関係者の皆さんに多大なご甚力とご協力をいただきまして、無事に終了できましたことを心から感謝申し上げる次第です。

発掘調査については反省点も多く、今後に残された課題も多くありますが、この報告書が、埋蔵文化をはじめとする文化財の保護と研究の一助となることを期待するものです。

宮崎市教育委員会
教育長　柚木崎　　敏

例　　言

1. 本書は、宮崎市教育委員会が昭和60年 9 月10日から10月15日にかけて実施した吉村第二土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 ―浮ノ城遺跡―の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査に際しては、この地域に稲作水田跡の存する可能性が高いため宮崎大学農学部の藤原宏志助教授のご指導をいただいた。
3. 調査の関係者は次の通りである。

調査主体　宮崎市教育委員会

教育長	柚木崎　敏
教育局長	蛯原啓次
社会教育課長	緒方美利
同　補佐	曽我嘉徳
同　主査	野間重孝
同　嘱託	伊東　但
〃　〃	荒武麗子
〃　〃	西本洲司
〃　〃	橋本博文
調査員	藤原宏志（宮崎大学農学部助教授）

4. 資料整理については、荒武、西本、橋本があたり、挿図の実測及び整図、写真撮影は荒武が行った。
5. プラントオパールについての資料整理・分析については藤原助教授にお願いし、執筆を担当していただいた。
6. 本書の執筆、編集は、荒武が主として行った。
7. 本書に掲載した写真の一部は宮崎市区画整理課から提供していただいた。
8. 本書における出土遺物は、宮崎市教育委員会で保管している。

昭和 61 年 3 月

宮崎市教育委員会

本　文　目　次

第 1 章　序　説 …… 1

1.　調査に至る経緯 …… 1

2.　遺跡の立地と環境 …… 1

第 2 章　発掘調査 …… 4

1.　遺跡の位置と名称 …… 4

2.　調査の方法 …… 4

3.　調査の主な経過 …… 5

4.　遺　跡 …… 8

①　土　層 …… 8

②　遺　構 …… 10

③　土　器 …… 11

④　木製品 …… 14

5.　小　結 …… 15

第 3 章　浮ノ城遺跡における水田址の探査 …… 17

挿　図　目　次

第１図　浮ノ城遺跡の位置・主な周辺遺跡 …… 3
第２図　Ⅱ～Ⅲ区水田跡付近土層断面図 …… 7
第３図　Ⅳ区河川跡土層断面図 …… 8
第４図　Ⅳ区水路状遺構南壁土層図 …… 8
第５図　Ⅱ～Ⅳ区Ⅳ層遺構状況 …… 9
第６図　Ⅰ～Ⅳ区Ⅵ層上面遺構状況 …… 9
第７図　Ⅲ区溝状・畦畔状遺構平面図 …… 10
第８図　Ⅳ区出土土器実測図 …… 12
第９図　Ⅰ～Ⅳ区出土土器実測図 …… 13
第10図　B．C．D地点におけるイネ科植物生産量 …… 16
第11図　Ⅳ層（Ⅱ－Ⅲ区）における水田址推定分布域 …… 19
第12図　Ⅵ層（Ⅱ－Ⅲ区）における水田址推定分布域 …… 19
第13図　Ⅳ層上面遺構状況（Ⅱ区～Ⅲ区） …… 19
第14図　Ⅵ層上面遺構状況（Ⅱ区～Ⅲ区） …… 19

表　目　次

第１表　浮ノ城遺跡出土土器一覧表 …… 11

図　版　目　次

図版１　浮ノ城遺跡遠景及びⅡ～Ⅲ区遺構状況 …… 20
図版２　Ⅳ区土器出土状態及び浮ノ城出土土器１～８ …… 21
図版３　浮ノ城遺跡出土土器９～28 …… 22
図版４　Ⅳ区水路状遺構木片出土状況及び加工の痕跡のみられる木片類 …… 23

第1章　序　　説

1. 調査に至る経緯

昭和57年6月、吉村町浮ノ城・天神前・大田ヶ島・江田原の各一部あわせて19.6ヘクタールについて土地区画整理事業（吉村第二土地区画整理事業）の計画があるので、埋蔵文化財等分布調査をしてほしいという依頼が、宮崎市区画整理課の方からなされた。

この計画区域のある周辺一帯は、古くから遺跡の多いことで知られている。浮ノ城に限ってみても以前墓地の造成中に弥生時代中期の甕形土器などが発見されており、全国遺跡地図にも散布地として記載されている。またこの地域は地形の関係から、以前より県内外の考古学関係者の間で水田跡の存在が期待されるところが大きかった。そのため、水田跡探査を中心とした事前調査を行うことが望ましいということになった。

昭和59年1月17日～2月10日、宮崎大学農学部の藤原宏志助教授、ならびに京都大学地形地質調査研究室勤務の外山秀一氏を招へいして、指導をお願いし地形・地質・プラントオパール分析のための試掘調査を実施した。その結果、水田跡の存在する可能性の高い土層として第Ⅳ層と第Ⅵ層が確認された。

今回の調査は、その結果をもとにして遺構の確認を目的として宮崎市教育委員会が主体となって行った。

発掘調査関係者は次の通りである。

宮崎大学農学部助教授	藤原　宏志（昭和58年度調査・昭和60年度調査）
京都大学地形地質研究室	外山　秀一（昭和58年度調査）
宮崎大学農学部	杉山　真二（　　〃　　）
	（昭和60年度調査）
宮崎市教育委員会 社会教育課	野間重孝、伊東　但、荒武麗子

2. 遺跡の立地と環境

この遺跡の所在する宮崎市吉村町浮ノ城周辺は、大淀川の形成する沖積平野の北東にあたり、海岸線に沿って形成された砂丘と新別府川に狭まれた低地に立地する細長くのびた水田地帯の一画にあたる。このような細長い水田地帯のもととなった低湿地は、この一帯の地形のもととなっている砂丘の成立と深く関わりをもっている。砂丘は全部で4列あり、海岸線に沿って南北にのびている。それらは、形成された年代順に内陸にある方から、第1砂丘（檍－大島砂丘）、第2砂丘（江田原－山崎砂丘）、第3砂丘（防潮林－五厘橋砂丘）、第4砂丘（住吉浜－一ッ葉浜）、と呼ばれている。これらの砂丘と砂丘の間に細長く、砂丘に沿うように水田地帯が形成されている。これは、現在の一ッ葉海岸の背後にある細長く南北にのびる入江と形状がよく似ている。また第3砂丘の西側にある水田地帯の北に位置する江田神社裏の御池は、周辺の水田との間が

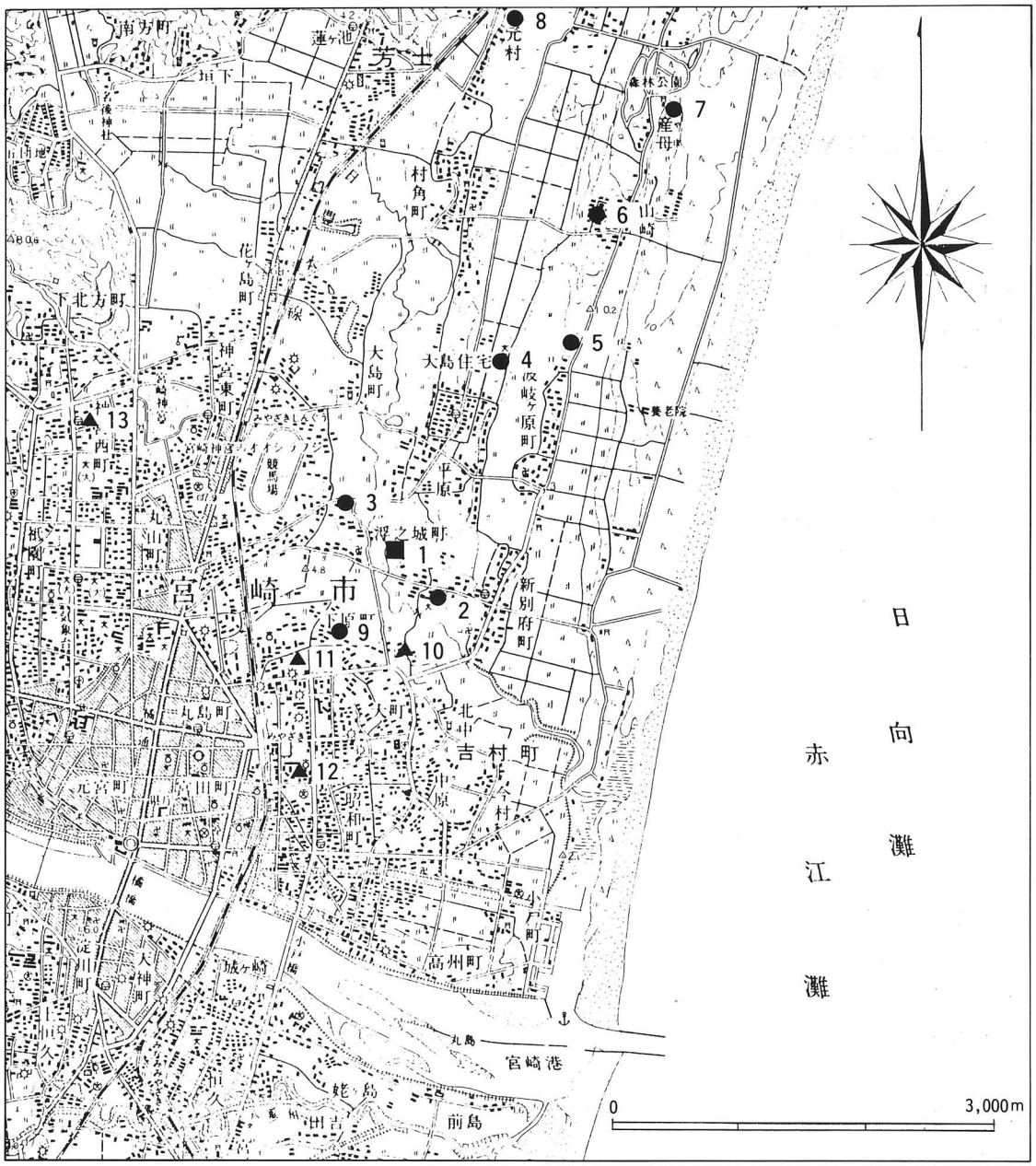
湿地となり、葦などが生えており、入江であったことを示している。

大淀川から流れてくる土砂が堆積して海岸線に沿って細長く砂洲を形づくり、その内側に現在みられるような入江ができ、やがて堆積がすすみ入江がとざされ海と分離し、徐々に陸化して低湿地となっていったのである。このような低湿地の成立時期は、第1砂丘は縄文時代後期には、第2砂丘は縄文晩期には成立していたといわれているので、その後背地の成立も同時期か若干くだる時期には完全にできあがっていたと思われる。

このような砂丘と低湿地との関係は、生活の場と生産活動の場といった関係で把えられ、理解することができる。砂丘上には、住居・墓地が営まれ、そこから見下ろす低湿地あるいは入江、海、河川といったものが、狩猟、漁撈、採集などの場として把えることができ、この低湿地が、縄文時代の伝統的な狩猟、採集を残しながら新しい経済手段としての稲作を取り入れようとしている初期の農耕民にとって、小規模の水田を営んでいくのに好適な場として認識されたであろうことは容易に想像できる。

さて、この遺跡は前にのべた第1砂丘の西側に、細長く南北にのびている水田地帯＝低湿地にあり、このほぼ中央を新別府川がほぼ南北に流れている。以前から第1砂丘に立地する遺跡（集落）の生産手段の場としての水田跡の存在が期待されるところであった。

この低湿地を生産手段として成立していた第1砂丘上の遺跡のありようを研究史的に見てみると、先にものべたようにこの第1砂丘は縄文後期ごろには成立していたといわれている（平原遺跡―市来式―）。弥生時代に入ると現在の宮崎市街地のほとんどが大淀川の沖積地として出現し、自然堤防や微高地が形成され、そこに集落が点々と営なまれるようになった。前期の遺跡では檍遺跡がある。この遺跡の存在は昭和26・27年に檍中学校校庭から甕棺が2個発見され、昭和31年には板付Ⅱ式土器が供献された石蓋土壙が見つかり、石川恒太郎氏・森貞次郎氏による調査・報告がなされたところから知られるところとなった。また中期から後期にかけての遺跡では、浮ノ城の墓地造成中に弥生中期の甕形土器（朝顔形口縁）のほぼ完形のものが出土したという記録があり、また昭和31年12月には、現在の宮崎東小学校の敷地（大島町火切塚）から2個の甕棺（朝顔形口縁）が出土している。他に同時期の遺跡では、元村遺跡、宮大牧場遺跡などがあげられるが、どの遺跡も調査が行われず、報告も出されていないので実態が今ひとつ把えにくい状況である。古墳時代の遺跡としては冬至遺跡（檍小学校付近）・引土遺跡（消滅）・檍1号墳（檍中学校南側）などがあげられる。



1 浮之城遺跡　2 檍中学校遺跡(檍遺跡)　3 浮之城弥生土器出土地
4 大島火切塚遺跡　5 石神遺跡　6 山崎遺跡　7 彦母遺跡(江田遺跡)
8 元村遺跡　9 中無田遺跡　10 冬至遺跡　11 庵ノ山遺跡
12 浄土江遺跡　13 宮大農園遺跡

第 1 図　浮ノ城遺跡の位置・主な周辺遺跡

第2章　発掘調査

1. 遺跡の位置と名称

吉村第二土地区画整理事業にかかる地域は、調査に至る経緯でも述べた通り宮崎市吉村町浮ノ城・天神前・大田ヶ島・江田原の各一部にまたがっている。位置は第1図に示した通りで、江平2丁目から一ッ葉神社まで通じているバス道路沿いにある。この道を東に向かい、新別府川にかかる浮ノ城橋を渡ってすぐ左手に広がっている水田地帯がそうである。すぐ東は檍遺跡のある第一砂丘が横たわっている。

今回の発掘調査においては、その主な調査範囲はいわゆる大田ヶ島といっているところに集中している。以前より文献に掲載されてきた「浮ノ城」出土の弥生中期の甕形土器の出土地としての〝浮ノ城〟あるいは全国遺跡地図に散布地としておさえられている〝浮ノ城〟という地名と今回調査した地点との関係は、時期的にも地域的にも今ひとつ明らかでなかった。

そのためこの遺跡を「浮ノ城遺跡」と命名することにやや抵抗感があった。しかし昭和58年度の試掘調査が始まった当初から〝浮ノ城〟と呼びならわしており、今から変更することは、新たな混乱を招くと思われたので、従来通り「浮ノ城遺跡」として報告することにした。

2. 調査の方法

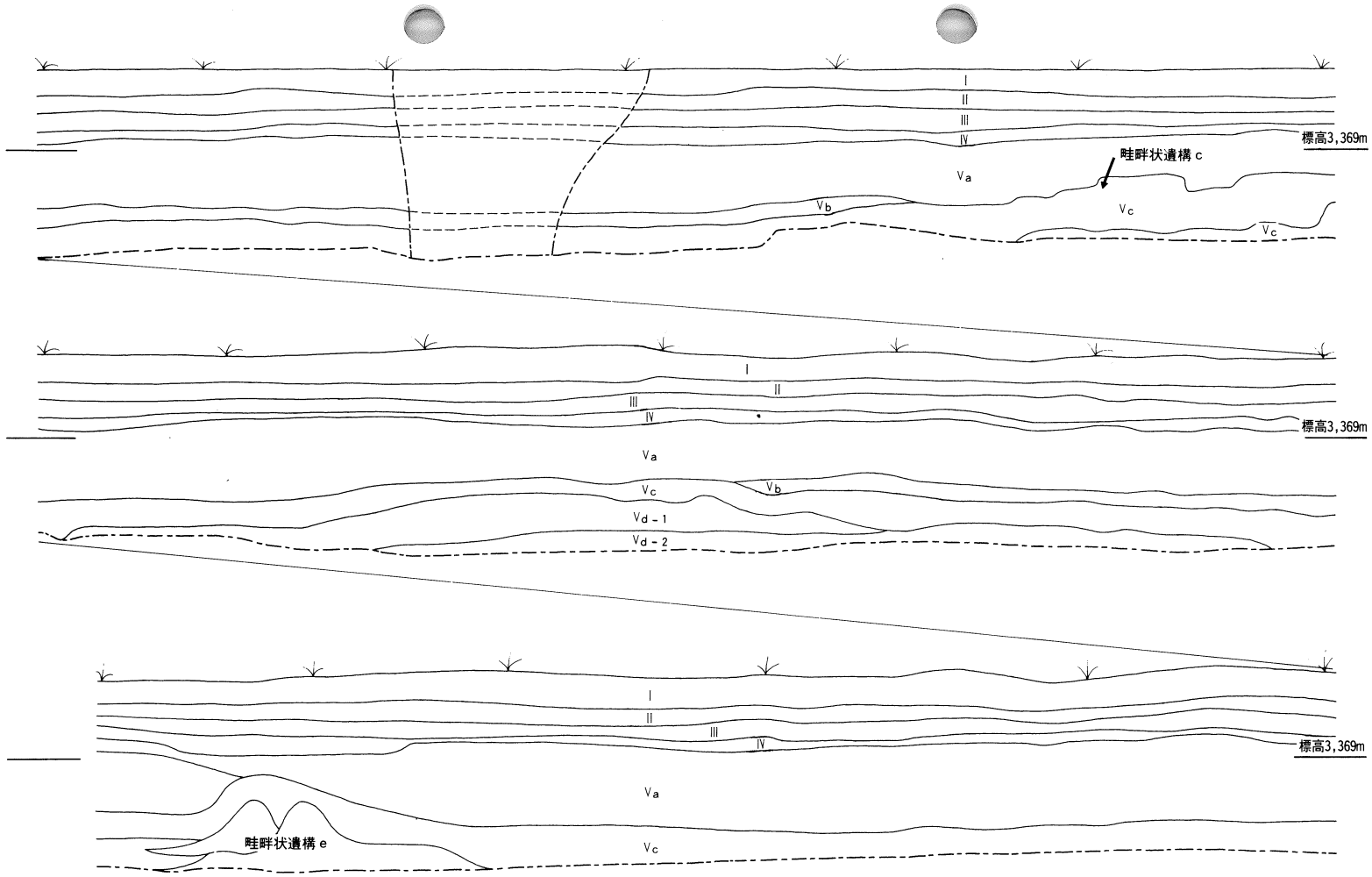
昭和58年度に実施したプラントオパール分析の結果をもとにして、調査区域を設定した。今回の工事予定区域内には道路が東西方向に2本と南北方向に1本、計画されていたが、そのうちの中央を東西方向に通る道路の西半分とその周辺が水田跡として有望であるということだった。そこでこれに沿って30mごとに5本の2m×2mのテストピットをユンボを使って掘り、その壁面から各土層ごとに土壌を採取して、新たにプラントオパールの定量分析を行い、その結果を見ながら最終的に遺構探査区域をしぼりこんでいくことにした。

発掘区は道路の幅6mで、東の方から30mごとにⅠ区～Ⅴ区まで設定した。テストピットについても東にある方からTP1～TP5と名づけた。このテストピットによる土壌サンプリングの後、藤原先生の指導により水抜きの為と層序を全体的に確認する目的で、発掘区の南端に各テストピットをつなぐ長いトレンチをユンボを使って掘った。その後、このトレンチの壁と北側の壁面とで層序を確めながら、ユンボを併用して発掘区内を掘り下げていった。

3. 調査の主な経過

S 60. 9.10 (火)	快　晴	プラント・オパールサンプリング用の杭打ちを行う。北側の道路はすでに工事に入っており、墓地の下あたりに土師器皿などが落ちていた。
9.11 (水)	快　晴	中央の道路計画線西側の部分に30mごとに2m×2mの大きさのテストピットを5本掘り、その壁面より土壌を採取する。北側の道路の南前面に粘土が露出しており、藤原先生から水田跡であるとの指摘があった。
9.12 (木)	は　れ	北側道路の南前面の工事を一時止めてもらい、粘土の範囲と溝状遺構について平板測量を行い、断面観察とその略測を行うと共に写真撮影を行った。
9.13 (金)	は　れ	ボーリングによるサンプリングを行う。
9.17 (火)	くもり	ユンボを使って表土剥ぎにはいる。発掘区の南端に長いトレンチを一本掘る。
9.18 (水)	快　晴	ユンボによる表土剥ぎを続行。作業員を使っての精査。
9.20 (金)	は　れ	昨日に引き続き、土層断面の清掃と溝状遺構の検出を行う。一方で測量杭を打つ。
9.24 (火)	くもり時々雨	土層が明確なところをユンボを使って掘り下げていく。Ⅳ層を平面的に把えることができた。
9.25 (水)	くもり時々雨	Ⅳ層の輪かくとⅣ層上面で確認できる溝状遺構とを平板測量する。
9.26 (木)	くもり一時雨	昨日の続きで平板測量を行う。ユンボでⅥ層上面まで下げる。畦らしきものが見えはじめる。
10. 3 (木)	はれのちくもり	Ⅰ区をユンボを使ってⅥ層まで下げる。Ⅲ・Ⅳ区の写真撮影を行う。3：00ごろから雨となり作業を中止する。

S 60. 10. 7 (月)	快　晴	台風にともなう雨の為、トレンチに水が溜まっていたのでポンプで汲み上げる。午後からⅣ区の水路状遺構の掘り上げを行う。弥生中期～後期の土器が出土する。壷の取り上げを行う。
10. 8 (火)	快　晴	Ⅲ区の砂丘裾に接してみえている溝状遺構について平板測量を行う。杭列と思われる小ピットがみられる。
10. 11 (金)	うすぐもり	Ⅳ区の水路状遺構の下層に粘質を帯びた黒青色の砂層が検出され、木片が出土した。
10. 12 (土)	くもり	Ⅳ区の水路を掘り上げ、木片を検出する。板状のものや鋭利なものでけずったような小枝などが見られる。
10. 14 (月)	は　れ	Ⅳ区の水路の木片を取り上げ、土層図をとる。Ⅱ区の水田跡の北側土層図をとる。写真撮影を行う。
10. 15 (火)	は　れ	各区ごとに再度、土壌のサンプリングを行い、写真撮影を行う。Ⅳ区の水路状遺構の木と土器類を取り上げ、作業を終える。

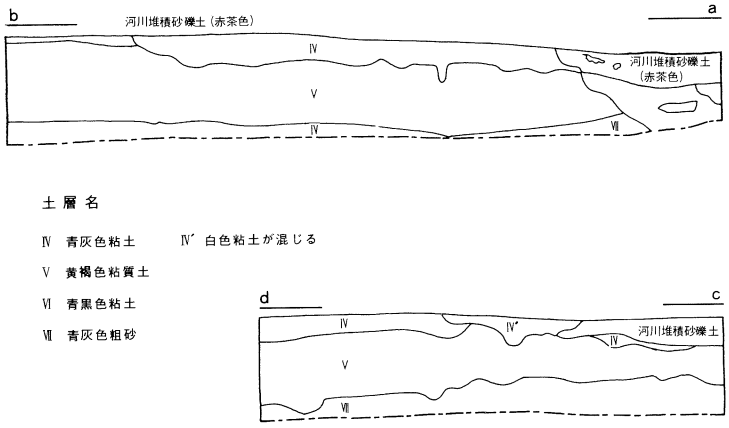


土層名

I	耕作土	IV	黒色粘土	Vc	灰青色粘質土
II	淡黄色土	Va	灰褐色粘質土（マンガン含む）	Vd-1	黄褐色砂質土
III	茶褐色土（黄色、白色の粒子を含む）	Vb	灰色粘質土（　〃　）	Vd-2	灰青色砂質土

0　2m

第 2 図　Ⅱ～Ⅲ区水田跡付近土層断面図



第 3 図　Ⅳ区河川跡土層断面図

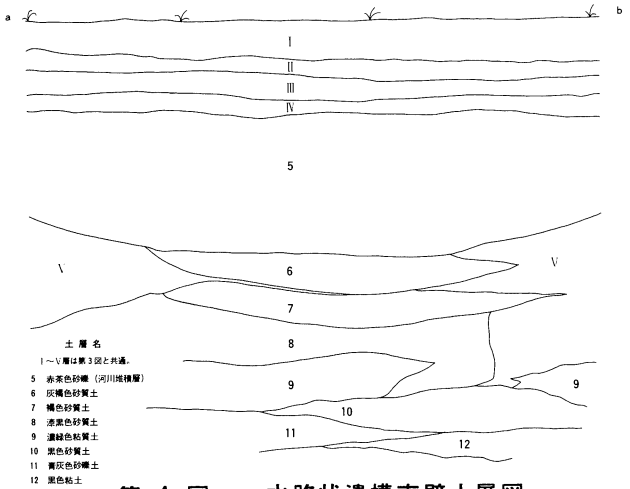
4. 遺　跡

① 土　層

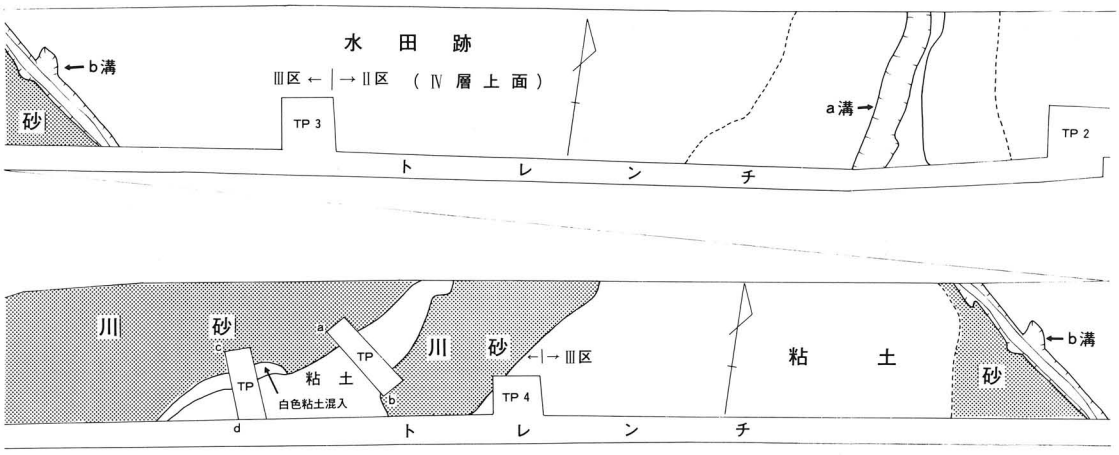
昭和58年度の試掘調査の際、この遺跡内の土層については耕作土も含めてⅠ～Ⅶ層の7層に分けることができた。基本的にはこれで良かったが、地区の西側の新別府川に近接するところでは比較的浅いところで赤っぽく粒子の粗い川砂があらわれ、また南東にあたる案野山神社のある丘地の裾近辺の水田や、北東の住宅地や墓地のある丘地の下あたりの水田でも浅いところからすぐに砂が出はじめたりした。また必ずしも平坦でなく、かなり波打った土層の状況を示すことも確認された。これはこの地が、現在見られるような広範な低地ではなく、その間に小砂丘が点在していたため、あちこちで小規模な山と谷が形成されていたためと考えられる。その後、明治・大正・昭和を通じて耕地整理が行われており、上層ではフラットな安定した層が広範囲につづくようになる。（Ⅲ～Ⅳ層上面）また新別府川に近い西端では、河川によるはんらんの為、地形が変化しており、河川痕をなしている。大淀川の流域全体での河川の流路の変遷として把えられるだろう。

今回の調査区内においても基本的には、前回の土層の分離法を踏襲したが、同じく調査区のⅠ区とⅤ区では、ずいぶん様相が異なっていた。中心部となったⅡ区～Ⅳ区についてはほぼ同じ土層の流れを把えることができた。しかし遺構の検出に伴ってもう少し微妙な分離の必要性を感じ、前回に比べ多少の付加が出てきたことは否めない。

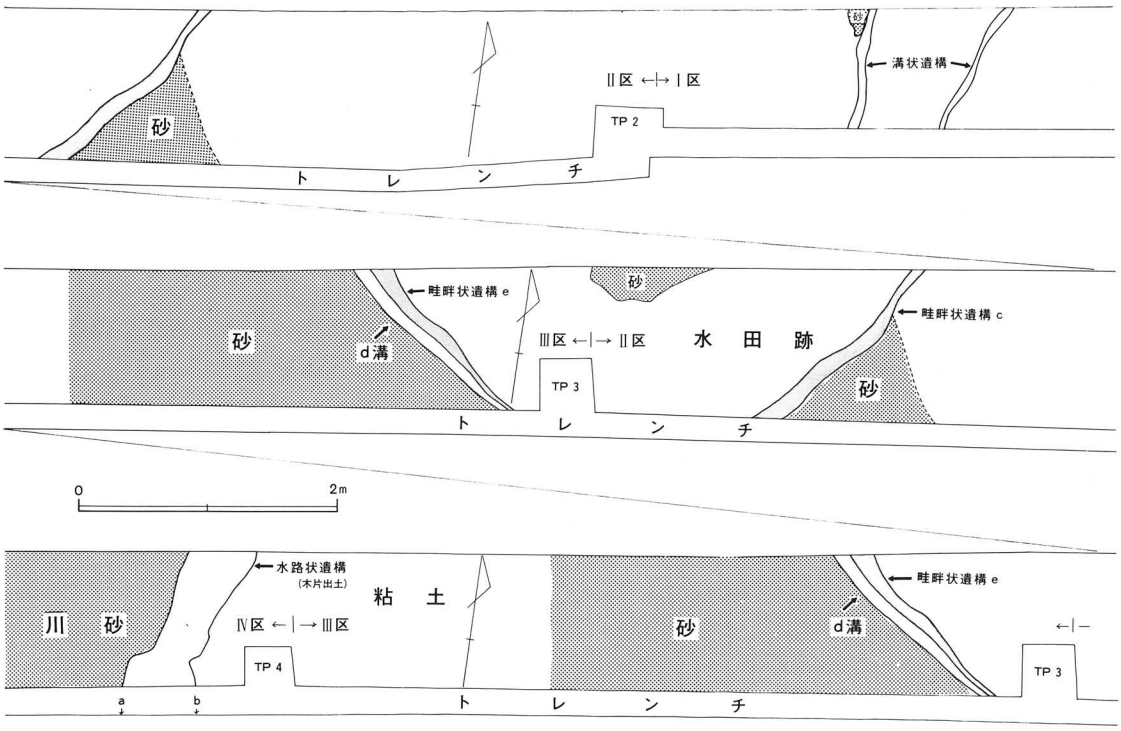
土器はあまり多くなかったが、Ⅰ層～Ⅳ層上半には須恵器・土師器・布痕土器などが含まれていた。Ⅵ層上面では、底部が多かったが、弥生中期後半の土器が見られた。Ⅳ区で検出された木片・木製品を出土した水路の底部あるいはそれより下層の黒色砂層から出土した土器片もほぼ同時か若干逆のぼるくらいの時期のものである。しかしⅤ区より西側ではかなり深くまで弥生中期の土器に混じって須恵器や糸切り底の土師器Ⅲが見られた。また現在の新別府川の川底ではよく弥生中期～後期の土器がみられることを付け加えておきたい。



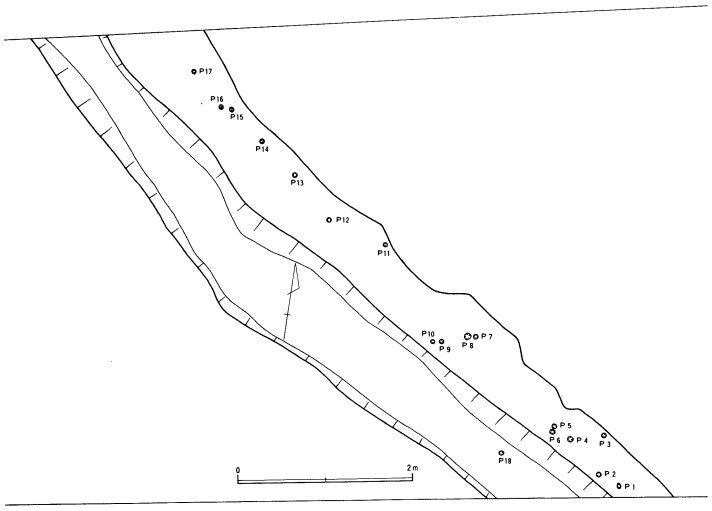
第 4 図　水路状遺構南壁土層図



第 5 図　　Ⅱ～Ⅳ区Ⅳ層遺構状況



第 6 図　　Ⅰ～Ⅳ区Ⅵ層上面遺構状況



第 7 図　　Ⅲ区溝状・畦畔状遺構平面図

② 遺　　構

遺構の検出は、畦畔とそれに伴う施設を見つけることを意識して行われたが、発掘区域内は現在まで連続して水田として利用されており、間層もなかったため、特定の時期の水田跡・畦畔を見つけ出すのは大変困難を伴った。Ⅳ層上面まで下げた段階でⅡ区において断面⌣状を呈する溝状遺構（a溝）があらわれた。埋土はⅣ層と同じ青黒色粘土で、周辺はⅣ層とは若干色調の異なる、黄褐色粘土の混じった青灰色粘質土が帯状に広がり、それに掘り込まれる形でa構はあった。土器は見られなかった。Ⅲ区においてもほぼ同規模の溝状遺構（b溝）が、これは小砂丘に掘りこまれていた。a溝とは逆の北西から南東方向へのびており、この両溝の対称性には何らかの両者の関係をうかがわせるものがあった。Ⅳ区では、砂がⅠ～Ⅲ区とは様相が異なり、砂丘のそれではなく、粒子が粗い赤味を帯びた砂利が流紋をなして広がっている。その間に青灰色粘土に白色または黄白色を混ぜたような粘土帯が残っている。洪水によるはんらんなどで河川の流路がずいぶん変化したようである。

Ⅵ層上面では、Ⅰ区において若干レベルの高いところであったが、2本の細い溝状遺構が検出された。ここでは少し茶色味を帯びた砂層もあらわれはじめ、遺構として把えどころがなく何であるかわからなかった。Ⅱ区とⅢ区においては、Ⅳ層上面において把えられたと同じような状況での溝状遺構と畦畔と思われる盛土が確認できた。Ⅱ区においては溝状遺構は確認できず、畦畔と思われる帯状に色調の異なる箇所と砂丘の痕跡と思われる砂層があった。（c）またⅢ区では溝状遺構（d溝）と畦畔が併行して北西方向にのびており、畦畔を精査している際に粘土のつまった小ピットがいくつも現われた。杭列痕ではないかと思われるが、深さはⅥ層上面のレベルから2.5～4㎝と浅かった。しかしこれも畦畔の上面から考えるともう少し深くなり、あながち杭列でないとも言い難い。

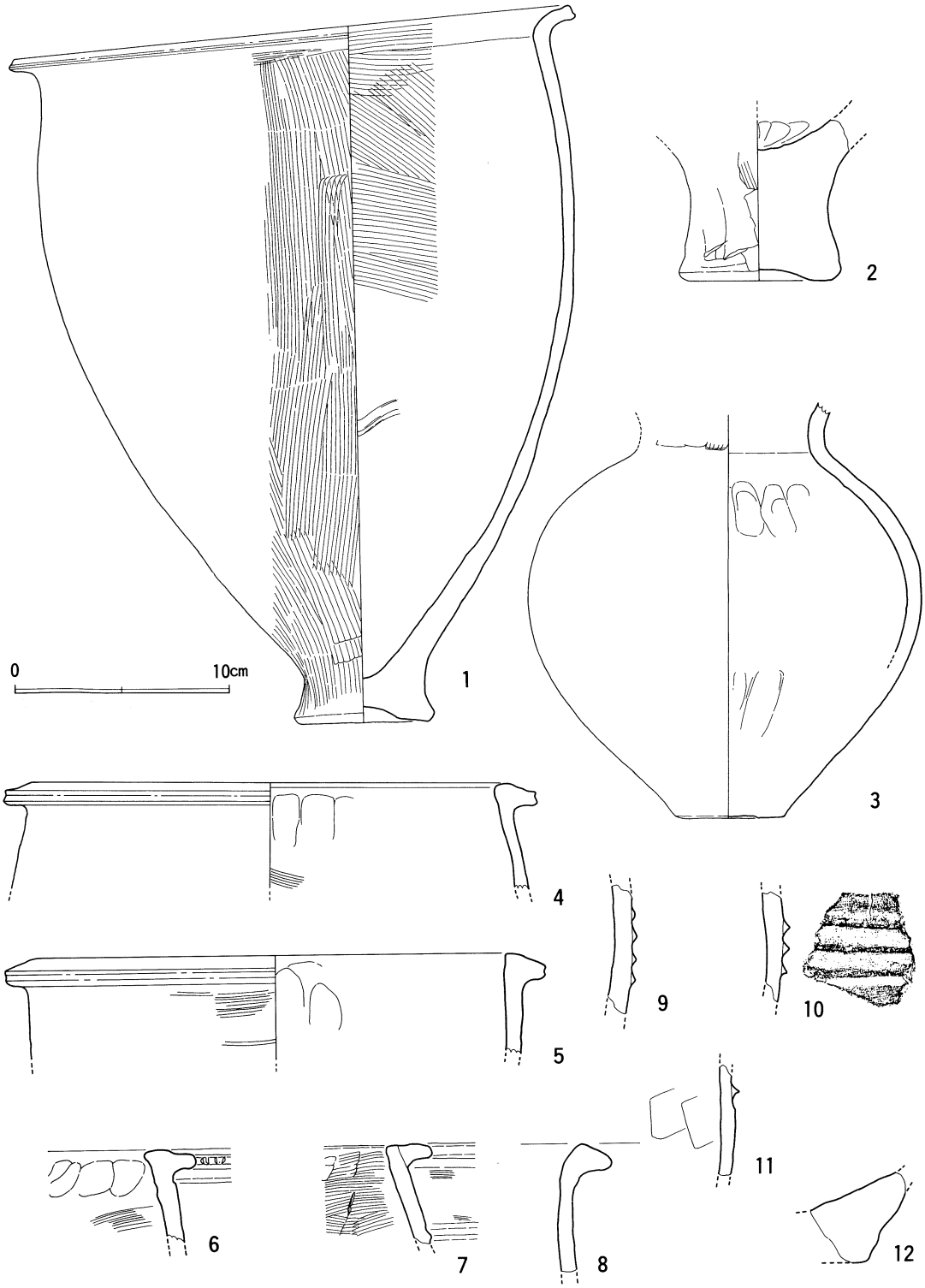
このd溝とcの間には青灰色粘土（Ⅵ層）が存在し、その中央部の北壁側から砂層があらわれている。Ⅳ層上面のときに比べて粘土域（水田跡範囲）は狭くその三方を小砂丘に囲まれた小さな入江状を呈していることになる。Ⅳ区になると砂が広がっておりⅥ層又はそれと同レベルの粘土層もごくわずかになり薄くなっているようである。また川砂が多くなる。Ⅳ区のⅥ層上面の段階で粘土と粘土にはさまれていた川砂の下は、Ⅵ層上面になって⌣状にくぼみ水路状を呈するようになる。ここには多くの木が周縁に溜まっていた。直径2～4㎝程度で、自然木も多かったが中には板状のものや鋭利な刃物で加工したとしか思えない木製品と言ってよいも

のもあった。この水路をさらに掘り下げると赤茶けた鉄分を含んだ〜状の底にあたり、それより下には、緑色を帯びた黒色砂層、緑色を帯びた黒色粘質土（腐植土）と続いておりこの土層からも土器が出土した。Ⅴ区になると砂が再び粘土になるが、黒味のつよい粘りのある土である。鉄分が多く、自然木の流出したものが多く見られいわゆるタカシコゾウが多く見られるようになる。この区でも弥生中期後半の土器が見られるが、Ⅳ区における水路の下から出てくる黒色砂層・黒色粘質層と同レベルの層になっても須恵器・土師器が混在しているのがみられる。

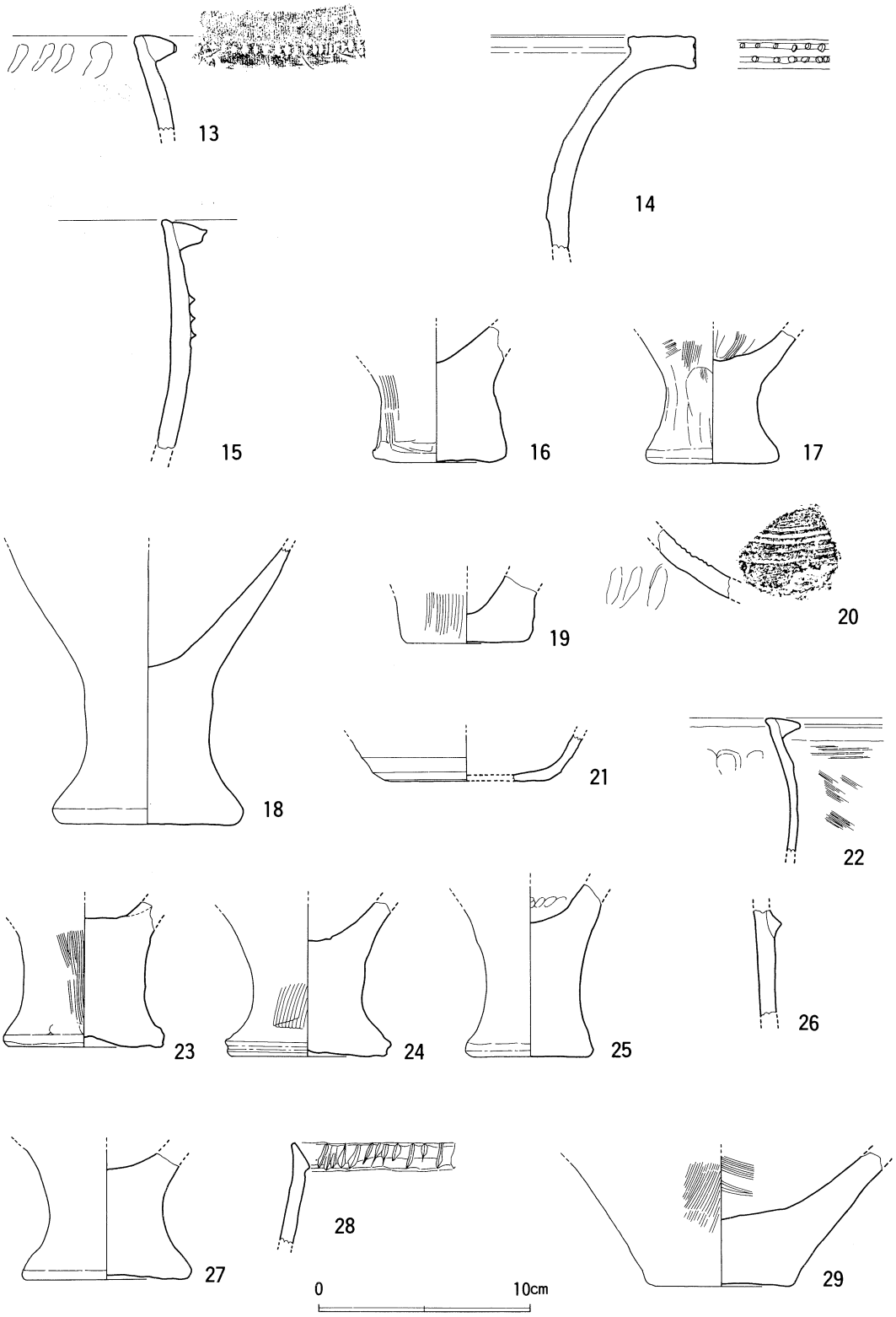
③　土　　器

第１表　　浮ノ城遺跡出土土器一覧表

挿図番号	出土地点	胎　　土	焼成	色　　調	口径（推定）	底径（推定）	備　　考
第８図１	Ⅳ区河川跡	良，赤褐色粒子・細砂を含む	良	淡褐色	26.4 cm	6.55 cm	ほぼ完形の甕。内外面に縦・斜向のハケ目。口縁内外は横ナデ。上がり底。
2	Ⅳ区 河川跡Ⅴd層	粗砂・細砂を多く含む	良	赤橙色	／	7.5 cm	底部。内外面に板状の小口痕のつくヨコナデ。磨滅が著しい。上がり底。
3	Ⅳ区 水路内上層	良，ウンモなど細砂を含む	良	外面は淡褐色 内面は灰色	／	(5.05) cm	壷，口縁部は欠失。頸部にハケ目，胴部はミガキ？内面は指押え痕。
4	Ⅳ区水路内	良，細砂・金ウンモなどを多く含む	良好	赤褐色	(内径24.8) cm	／	甕口縁小破片。外面はヨコナデ，内面は指押え後ナデ・ヨコハケ目。
5	〃	精良，細砂・赤褐色粒子を含む	良好	外面は暗茶褐色 内面は淡橙色	(内径15.0) cm	／	甕口縁破片。口唇部に沈線，口縁内外はヨコナデ，胴外面はヨコハケ目。
6	〃	良好，細砂・赤褐色粒子を含む	良好	外面は淡褐色 内面は淡褐色〜赤茶色	／	／	甕口縁部小破片。口唇部にキザミ目，口縁内外に指押え，ハケ目のつくヨコナデ。
7	〃	良好，細砂を多く含む	良	淡褐色	／	／	甕口縁部破片。内外面にハケ目の残るヨコナデ。胴部に凸帯をめぐらす。
8	〃	良，粗砂・細砂を多く含む	良	淡赤褐色 断面は淡褐色	／	／	口縁部小破片。調整は磨耗の為不明瞭，口縁内外はヨコナデか？
9	〃	良，粗砂を含む	良	淡赤褐色	／	／	胴部小破片。外面に４条の凸帯，横ナデ，内面はハケ後ていねいなナデ。
10	〃	良，細砂・金ウンモ片などを含む	良	外面は暗茶褐色 内面は淡赤褐色〜淡褐色	／	／	胴部小破片。内外面共ナデ，外面に３条の凸帯。
11	〃	良，細砂・金ウンモなどを含む	良好	外面は暗茶褐色 内面は淡褐色〜灰褐色	／	／	胴部小破片。外面はナデ，ススのような黒い付着物あり，凸帯がめぐる。内面はナデで板状工具の小口痕がついている。
12	〃	良，細砂を含む	良	淡灰褐色 断面は灰黒色	／	／	底部小破片。内面はナデ，磨耗が著しいため，調整不明瞭。
第９図13	Ⅳ区 水路直下Ⅷ層	良好，細砂・金ウンモを多く含む	良好	外面は赤褐色 内面は灰褐色	(内径23.0) cm	／	口縁部小破片。端部にキザミ目，外面はナデ，内面は指痕ののこるナデ。
14	〃	細砂を多く含む	良	淡褐色〜赤茶色 断面は灰黒色	／	／	口縁部破片。端部に２列の列点文がめぐる。外面はナデ，内面はハケ目を施していると思われるが不明瞭。
15	〃	良，細砂を多く含む	良	明るい黄褐色	／	／	甕口縁部破片。端部はヨコナデ，胴上部に３条の凸帯をめぐらす。内面は指押えの後にハケ目を斜めに施している。
16	Ⅴ区 TP５　層	良好，やや粗い砂粒を多く含む	良好	外面は明赤褐色 内面は淡黄褐色	／	6.3 cm	底部。外面はハケ目の後ナデ，内面はヘラ状工具によるナデ，若干上がり底。
17	〃	良，細砂・赤褐色粒子を多く含む	良	外面は淡黄褐色 内面は灰褐色	／	6.25 cm	底部，平底。内外面共にハケ目痕の残るナデが施されている。
18	〃	良，粗砂・細砂を多く含む	良	赤褐色	／	(9.0) cm	底部半欠。磨耗が著しく，調整は不明。
19	〃	良好，粗砂を含む	良好	外面は明赤褐色 内面は灰褐色	／	3.2 cm	底部1/4弱欠失。外面はハケ目，内面は板状工具によるナデ。
20	〃	良好，細砂・赤褐色粒子を含む	良好	外面は灰褐色〜灰黒色 内面は淡橙色	／	／	胴部小破片。外面はヨコナデ，沈線が６〜７条めぐる。内面は指押えの後ナデ。
21	〃	精良，若干細かい砂を含む	良	淡褐色	／	(8.0) cm	須恵器坏破片。外面はヘラケズリ，内面はナデ，底はヘラ切り痕残る。
22	Ⅲ区　Ⅳ層	良，細砂・赤褐色粒子を多く含む	良	外面はくすんだ茶褐色 内面は灰褐色	／	／	口縁部破片。口縁内外はヨコナデ，外面は斜向のハケ目の後ナデ，内面指ナデ。
23	〃	良，粗砂・細砂・赤褐色粒子を多こ含む	良	淡褐色 断面は灰黒色	／	7.6 cm	底部。外面はタテ方向の細かいハケ目，裾端部はヨコナデ，内面はナデ？　上がり底。
24	〃	粗砂・細砂(ウンモ・赤褐色粒子)を多く含む	良	赤橙色	／	7.8 cm	底部。外面はハケ目，裾端部はヨコナデ，内面はナデ，若干上がり気味の底部。
25	〃	良，細砂・赤褐色粒子を多く含む	良	赤味を帯びた淡褐色	／	6.1 cm	底部。外面はナデ，内面は指押え痕が残る。平底の細長い底部。
26	〃	良，やや粗い砂粒・細砂(金ウンモなど)を多く含む	良	赤褐色	／	／	胴部小破片。内外面共にナデ，磨耗の為不明瞭，断面三角形の凸帯がめぐる。
27	Ⅱ区 Ⅴd層上面	良，粗砂を多く含む	良	赤褐色 断面は黒灰色を呈す	／	(8.0) cm	底部。端部が1/3位欠失している。調整はナデ，若干上がり気味の底部。
28	〃	良好，細砂を含む	良好	外面は灰褐色(白っぽい) 内面は灰色まじりの黒褐色	／	／	口縁部破片。口縁外に刻み目をめぐらす。内外共にナデを施す。
29	Ⅰ区TP1 Ⅶ層上面	良好，やや組い砂粒を含む	良好	淡褐色〜灰褐色 断面は淡黄褐色〜灰色	／	6.6 cm	壷底部？　外面に細かいハケ目，下位はナデ消し，内面はハケ目の後ナデ（磨き？）



第 8 図　Ⅳ区出土土器実測図



第 9 図　Ⅰ～Ⅳ区出土土器実側図

④　木　製　品

Ⅳ区のⅥ層上面と同レベルにおいて〜状の水路状遺構の検出を見、そこに多数の自然木・木片・木製品が溜まっていた。

それらの中で、明らかに鋭利な工具で加工したとしか考えられないものが数点出土していた。図版４に示したとおり、板状のもの（１〜４）、小枝の端部を鋭く切り落としたもの（５〜８）、柱状の先端をけずったもの（９）、板状のものの先端を鋭く切ったもの（10）などがある。また、図版には載せていないが、杭状のものなども見られた。

5. 小　結

今回の発掘調査では、遺構としてはどの層においても平面プランを確認したにとどまり、遺構の立体像をとらえ、精査するには至らなかった。しかし狭い範囲の中ではあるが、大まかな遺跡の性格といったものは理解できたのではないかと思う。

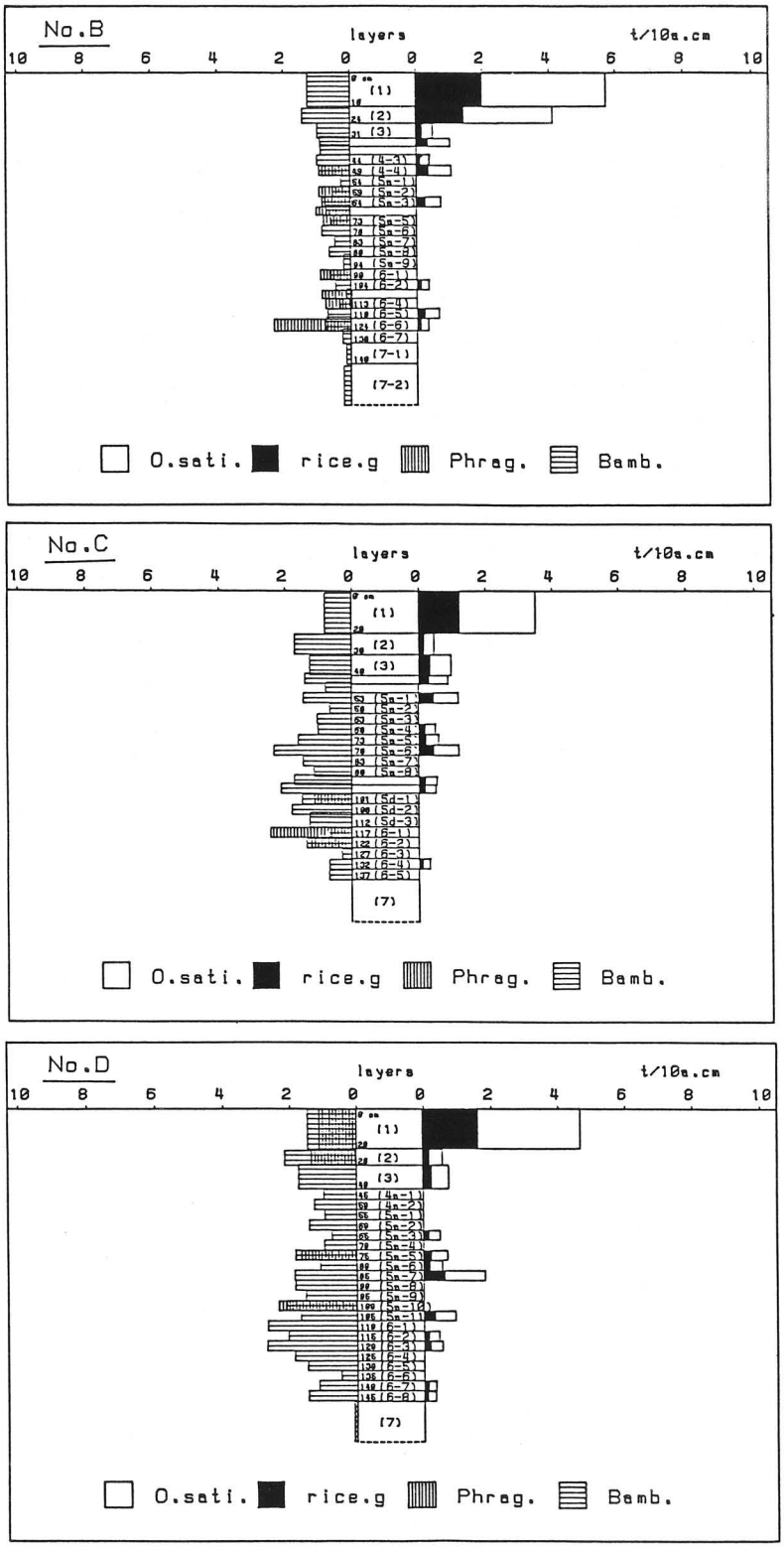
水田跡は、Ⅳ層上面においてはａ溝とｂ溝に囲まれた部分に、Ⅵ層上面においてはｃとｄ溝の間に想定できた。この２つの水田跡における溝は両者とも同じ方向性を示している。これはこの遺跡において水田が継続して営なまれていたための現象と把えられるだけでなく、地形的な制約や水利施設としての利点等が、両者の溝状遺構に同じ方向性を採用させたと見ることができる。しかしこの２つの水田の実態は全く異なっている。Ⅵ層上面においては、水田は小砂丘にまわりを囲まれた狭い入江状の低地に立地しており、同レベルのⅣ～Ⅴ区の状況からも明らかなように、川べりにどろどろの土がよどみ、その周辺の湿地帯も含めて広い範囲に葦が繁茂していたことを思わせ、その水田稲作の形態はかなり原初的な様相が感じられる。それに比べてⅣ層上面においてはより広い水田を得るために砂丘がけずられ、そこに溝状遺構と畦畔がつくられている。それが完全に人為的な作用によるものとばかりも言えないが、比較的発展した段階であるといえる。

土器は、Ⅳ区においてややまとまった出土をしている。この区はⅣ層上面においては、河川の流路となっており、そこからほぼ完形に接合できる弥生時代後期初頭の甕形土器が出土した。この土器が出土した地点の下層（Ⅵ層上面）においては、水路状遺構が表われたが、この溝の埋土の最上層には口縁を欠いた壷形土器が直立して埋まっていた。後期前葉くらいの時期かと思われる。この水路状遺構とその下に続いている黒色砂質土層には、中期後半くらいの底部破片が主として出土していた。このⅣ区においては撹乱している状況は認められなかったが、この土器が水田に伴うものかどうかは決めることはできない。Ⅴ区においてはⅣ区における黒色砂質土層と同レベル・同質と考えられる土層から、かなりの土器の撹乱した状況が見られる。

しかしこのⅤ区を除いてはⅥ層より下層まで撹乱が及ぶことはなく、Ⅳ層上半において須恵器・土師器を含むことはあるもののそれ以下はほぼ正常なまとまった出土状態を示している。

であるから狭い範囲に限定して述べればこの２つの水田跡のうちⅥ層のものは弥生時代中期後半～後期前半より新しい時期に営なまれたものではなく、古くても中期中庸を逆のぼることはないと推測できる。

この浮ノ城遺跡のある一帯は、前にも述べたように古くから弥生時代中期～後期の遺跡が砂丘上に多く分布することで知られており、旧入江の低湿地における原始的な水田稲作の可能性が早くから指摘されているところであった。今回の調査はこの水田跡を見つけることを意識して行われた。調査期間やその他制約の多い中で、調査の目的をすべて果たしたとは言い難いが、きわめて未熟な段階の、地形をそのまま利用した小規模水田稲作の存在を確認できたことは、今後の同地域を含んだ阿波岐ヶ原一帯の調査を行う上での、将来的見通しを示さするものとして意義ある調査であったと言える。



第10図　B. C. D地点におけるイネ科植物生産量

第3章　浮ノ城遺跡における水田址の探査

宮崎大学農学部　藤　原　宏　志

わが国における水田稲作の開始期は従来弥生時代初期とされてきたが、最近の調査により縄文時代終末期には北部九州へ水田技術が伝えられていたことが明らかになった。水田稲作の伝播についても、弥生時代中期には津軽平野にまで及んでいたことが実証されており従来の定説より速やかに広がっていたことがうかがえる。

宮崎における弥生時代の生産様式については、これを実証的に検討する資料に乏しいのが現状である。

このたび、宮崎市教委による浮ノ城遺跡調査が行われることになり、同遺跡における水田址探査を行うことになった。当該遺跡の周辺には檍遺跡が立地しており、なんらかの生産址が包蔵されている可能性が大きいと思料される地域である。ここではプラント・オパール分析による水田址の探査結果と考古学的発掘調査結果について若干の農学的検討を加えることにする。

1.　試料および方法

本調査の調査域は道路敷予定地で6 m × 130 mの帯状であり、分析試料の採取地点は30個所、試料数は310点である。

プラント・オパール分析は同定量分析の常法に順じた。

2.　分　析　結　果

分析結果の一部を第10図に示した。

各地点とも1層～3層で連続的にイネが検出され比較的新しい時代の水田層であることがわかる。4層～5層についても三地点でイネが検出され水田址が包蔵されている可能性が高いと判断された。6層については量的にやや少ないがイネが検出され水田址の可能性があると考えられた。

3.　考察および結論

(1)　分析的推定結果と考古学的調査結果

プラント・オパール分析による水田址包蔵域の推定結果と考古学的に確認された水田遺構の分布域はおおむね重なるが符合しない部分もある。両者が符合する部分では水田が営なまれていたと判断してよかろう。符合しない部分、すなわち分析的には水田域と推定されたにもかかわらず、遺構が検出されない部分については二つの考え方ができる。一つは水田以外の区域へ

周辺水田土壌が流入堆積した場合である。この場合は分析的に誤認されることがありうる。他の一つは水田であっても畦畔などの遺構が流出したため考古学的に検出できない場合である。今回の場合、発掘調査面積が少なく、狭小な帯状区域であるため、そのいずれであるかを決めるのは困難であった。

(2)　6層（弥生時代遺物包含層）

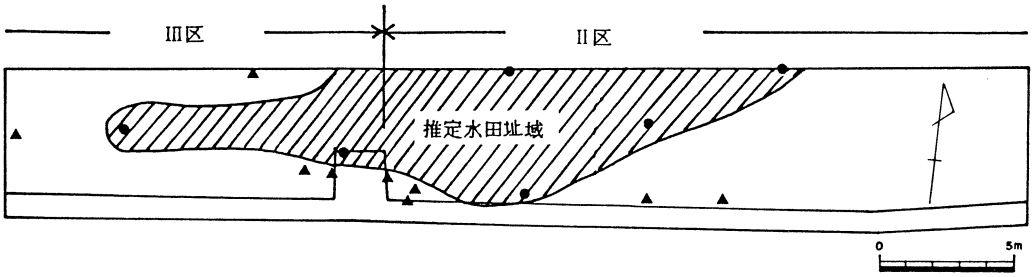
6層の堆積状況はこれまで各地で発掘された弥生時代水田遺跡の土層堆積状況に比べ極めて特異である。当該遺跡6層は砂丘の後背湿地に堆積した有機質粘土層である。発掘面積の関係で全体的な堆積状況を把握するのは困難であるが、発掘結果をみると起伏に富んだ砂地の中に不定形の低湿地が入り込みかなり複雑に自然流路が交差している様子がうかがえる。このような砂丘の後背湿地で弥生時代水田址の存在が予測される例は多いが、実際に水田遺構が検出された例はおそらく最初であろう。検出された溝は小砂丘の縁辺に沿っており、畦畔上の遺構をともなっている。水田の区画は詳らかでないが、これまでに発掘された水田址とは異なり後背湿地の自然地形をそのまま利用した不定形水田の可能性が高い。同時代の杭列をともなう水路も検出されているが、水田との関係は確認されていない。今回の調査でみる限り、当該遺跡の水田は整然と区画され、高度な水利施設をともなった型の水田ではなく、自然地形をほとんどそのまま利用し、簡便な用水路と畦畔をこれに備えた、いわば低湿地稲作に近い型の水田と考える方が自然である。

(3)　今後の課題

今回の調査は調査域と調査期間に制限があり、当該遺跡における弥生時代の水田様式を解明するにはいたらなかった。しかし前項で述べたように、当該遺跡の水田様式は他の水田遺跡で例をみない、より始源的な型の水田である可能性が高く水田稲作史を考える上で極めて興味深い事例である。

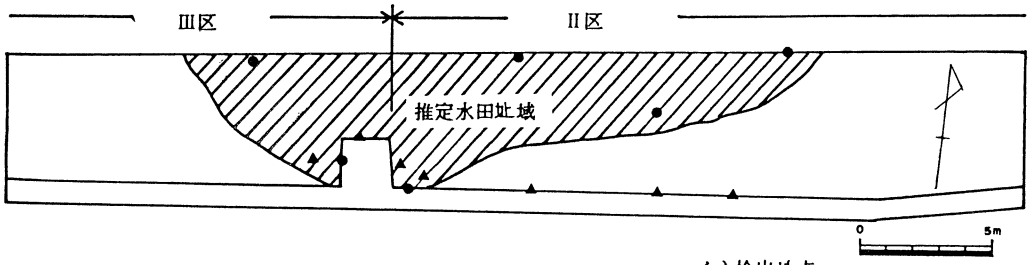
また、木製品の保存状態も良好であり、今後の調査により、水田遺構の全容が把握されるとともに貴重な遺物の検出も期待される。

なお、分析探査は宮崎大学院生[redacted]および[redacted]の協力を得て遂行されたものである。上記諸兄に謝意を表する次第である。



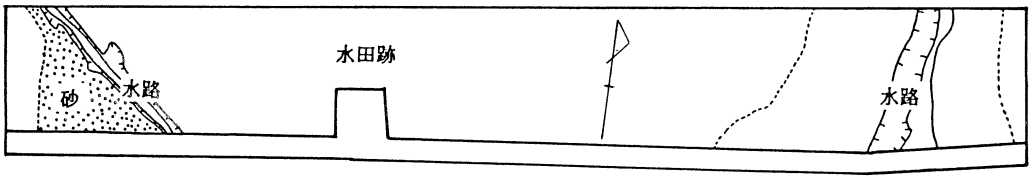
第11図 Ⅳ層（Ⅱ－Ⅲ区）における水田址推定分布域

● ：イネ検出地点
▲ ：イネ未検出地点

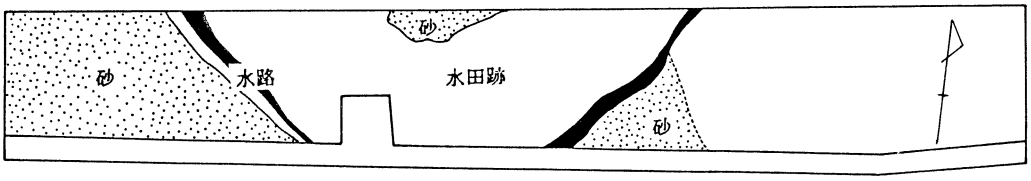


第12図 Ⅵ層（Ⅱ－Ⅲ区）における水田址推定分布域

● ：イネ検出地点
▲ ：イネ未検出地点



第13図 Ⅳ層上面遺構状況（Ⅱ区～Ⅲ区）

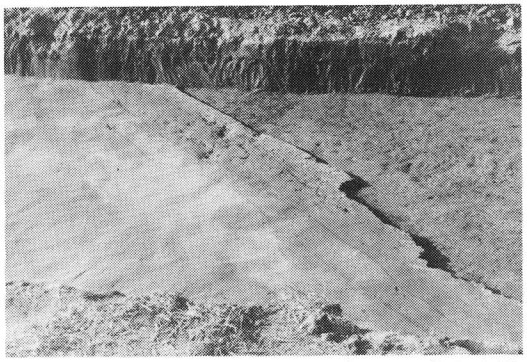


第14図 Ⅵ層上面遺構状況（Ⅱ区～Ⅲ区）

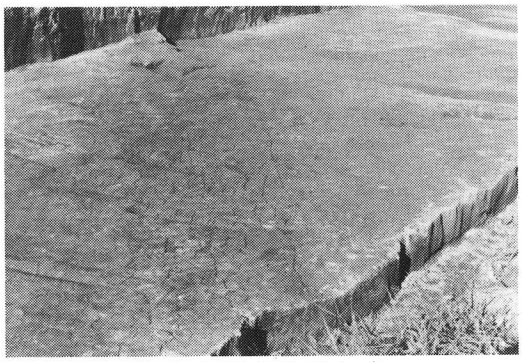
図　　版

浮ノ城遺跡遠景（南から）

発掘調査前の遺跡（西から）

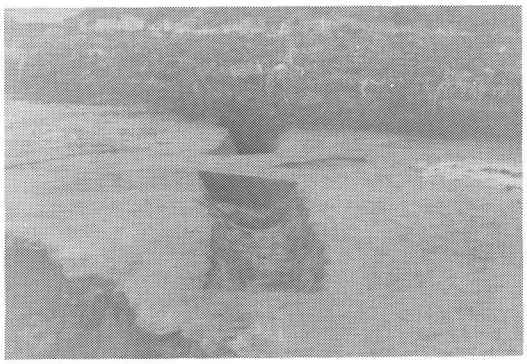


Ⅲ区 溝状遺構上面（ｄ溝）と畦畔状遺構

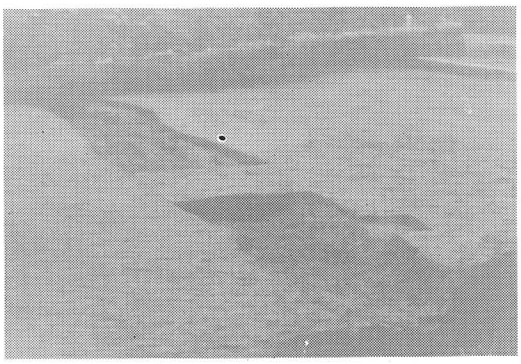


Ⅱ区 畦畔状遺構（ｃ）

↖Ⅵ層上面↗

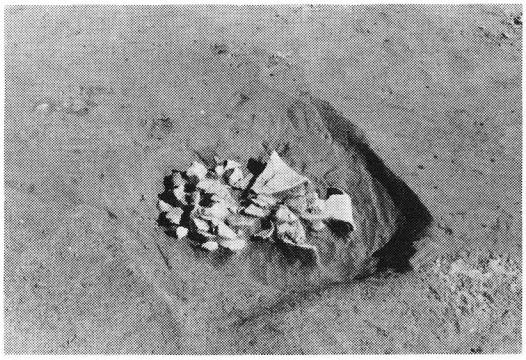


Ⅲ区 溝状遺構（ｂ溝）



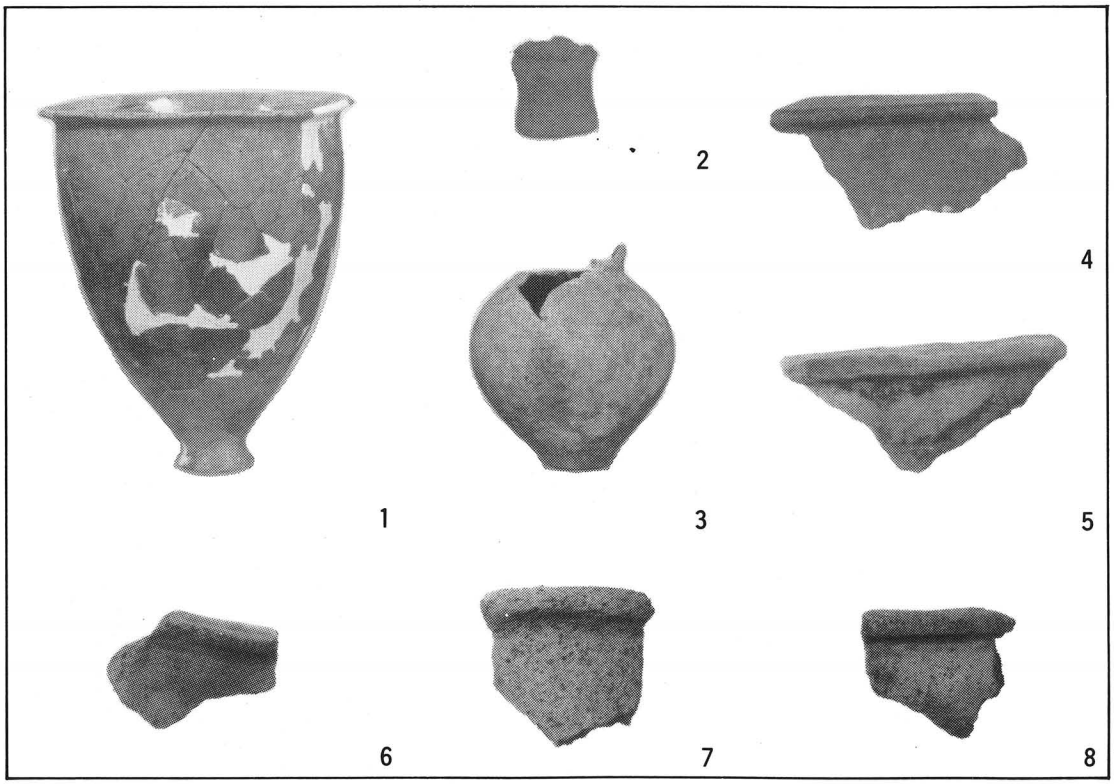
Ⅱ区 溝状遺構（ａ溝）

↖Ⅳ層上面↗

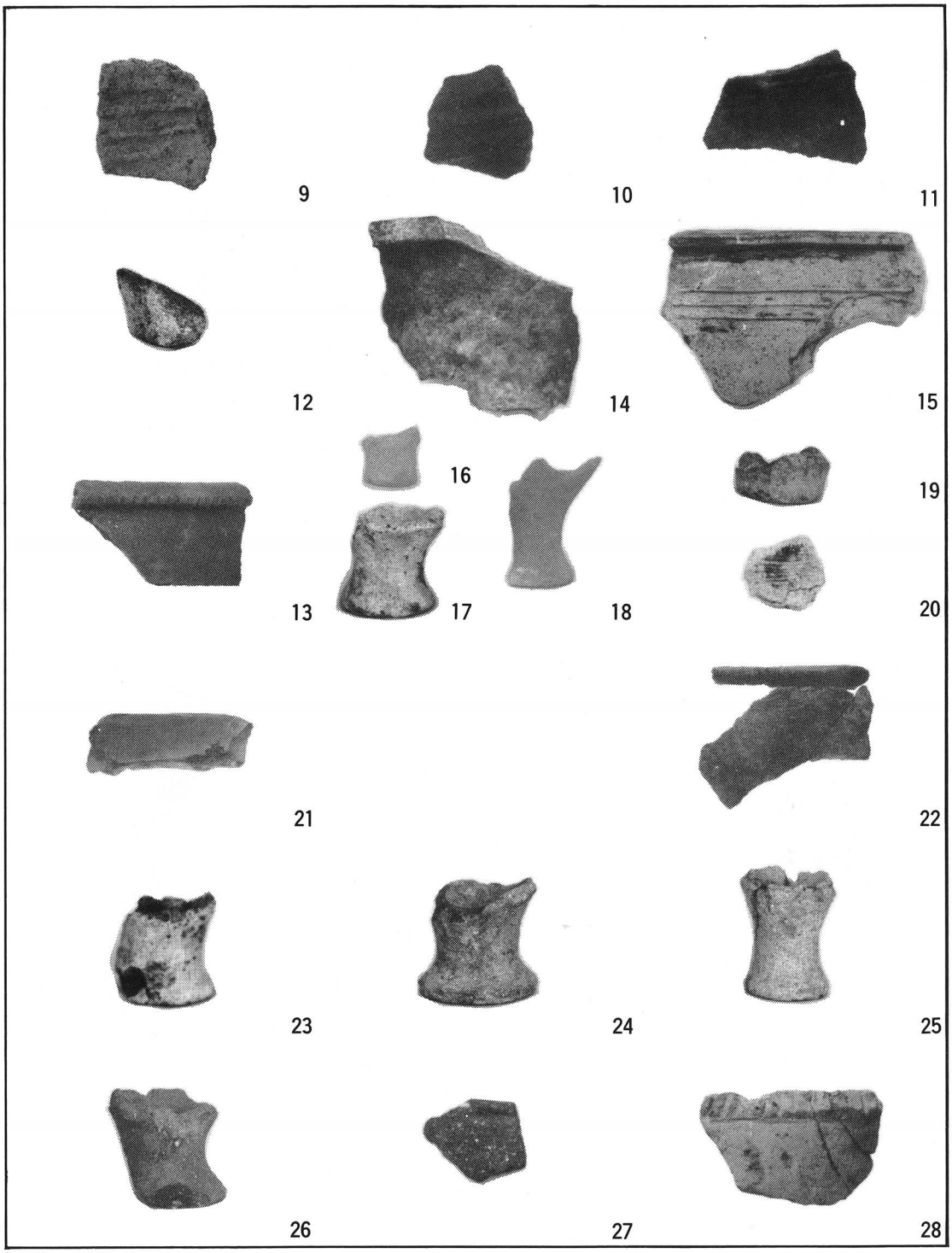


Ⅳ区 甕形土器出土状態

Ⅳ区 水路状遺構上面壺出土状態

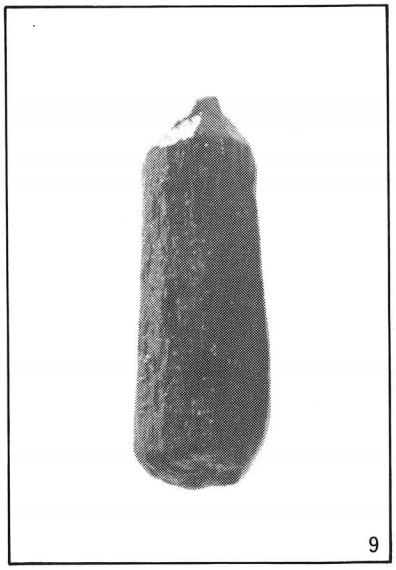


浮ノ城遺跡出土土器 1 ～ 8

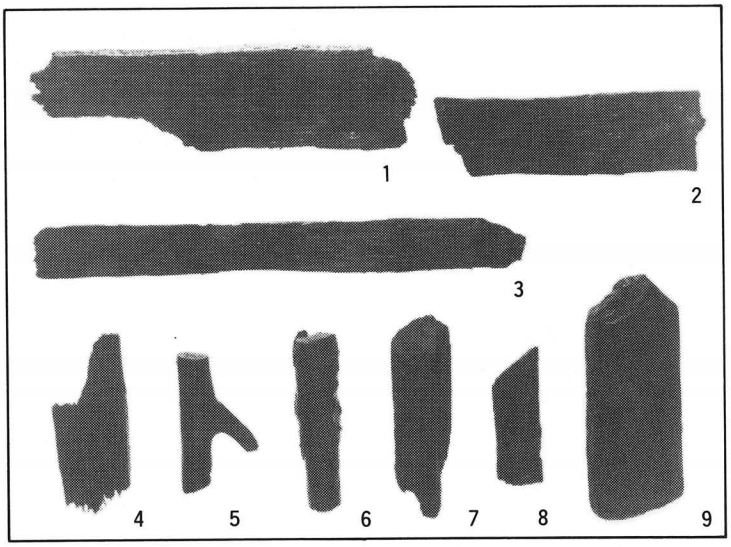


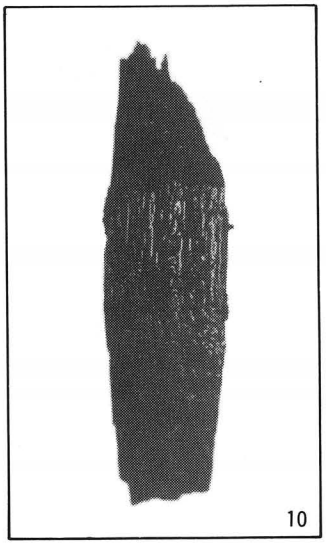
浮ノ城遺跡出土土器 9 ～ 28

Ⅳ区水路状遺構木片出土状況



加工の痕跡のみられる木片類 1〜10





吉村第二土地区画整理事業に
伴なう埋蔵文化財発掘調査報告書

―浮ノ城遺跡―

昭和61年3月31日

編集・発行　宮崎市教育委員会
宮崎市橘通西一丁目一番一号
宮崎市庁舎第2別館

印刷・製本　有限会社　黒田謄写堂
宮崎市大橋二丁目175番地